

平和への願いを広島へ、そして未来へ届きますように

「一緒に千羽鶴を作りませんか？」

とちぎコープは誰もが安心してくらせる地域社会づくりに貢献することを目指し、事業や活動が続けています。日々の「くらし」を支える原点は平和であることです。戦争の惨禍を学び、次世代に繋ぎ・伝えるため、とちぎコープは平和活動に取り組んでいます。今年も多くの組合員さんのご協力をいただき、千羽鶴を広島に届けることができました。活動の様子を紹介します。

折り鶴ボランティア

今年の折り鶴ボランティアは、5月～7月にかけて全事業所で開催されました。使用した折り紙は、過去に「原爆の子の像」へ捧げられた折り鶴などを原料に再利用した「再生おりがみ」です。「平和への願いを受け取り、再生し、未来へつなげる」という趣旨のもと、宅配センターの会場では初めて会う方とも和やかに会話をしながら、楽しく鶴を折る姿が見られました。

参加者からは「現地には行けないけれど、このような形で参加できてよかった」「二人で折るのも良いが、みんなで集まって折るのも楽しい」といった声が聞かれました。店舗でも「再生おりがみ」を配布し、回収BOXに多くの折り鶴をお寄せいただきました。

ピースアクションinヒロシマ

皆さんの手で折られた千羽鶴は、組合員理事から「ピースアクションinヒロシマ」に参加する子どもたちへ託されました。

毎年8月に被爆体験の継承や核兵器のない平和な世界を求める想いを共有する場として、全国の生協の組合員やその家族が参加・交流する「ピースアクションinヒロシマ・ナガサキ」が開催されています。今年、とちぎコープからは、「ヒロシマ」に小中学生を含む



参加者アンケートより（子どもたちの感想）

◆広島に行って勉強する前は、放射能なんて危険なものがあることを知りませんでした。資料館で見た写真や絵は、とてもショックだったし怖かったです。今は平和だけど、昔の日本はこんなに大変だったんだと思いました。だからもう、世界中で戦争はしてほしくないです。

◆写真でしか見たことがなかった原爆ドームや平和記念資料館などを訪れ、被爆した建物、衣服、お弁当箱などを間近で見ることができました。平和な暮らしが一瞬にして奪われた現実を目の当たりにし、もう二度と同じ過ちを繰り返してはいけないと思いました。

◆何より驚いたのは、広島が大都市だったことです。原爆で焼け野原になったのにここまで復興できたのは、広島の人たちの強い思いがあったからだと思いました。原爆投下からわずか3日後に運行を再開したという広島電鉄も当時の人たちの思いを受け継いで走り続けていて、ヒロシマの心を感じました。

◆「原爆の子の像」の周りにはたくさんの折り鶴があって、世界中の人たちから毎年1千万羽もの折り鶴が届くことを知って感激しました。禎子さんや原爆で亡くなったすべての子どもたちのために、禎子さんのクラスメイトが奮闘したと聞き、とても素敵なことだなと思いました。



「ヒロシマ」から帰訪後の「振り返りミーティング」でも参加者より体験を通じた深い学びが語られました。一羽一羽の折り鶴に込められた想いは、未来の平和へとつながっています。

現在も国内外から年間一千万羽もの折り鶴が奉納され、その再生事業も行われています。像の高さは9メートルで、頂上には折り鶴を捧げ持つ少女のブロンズ像が立ち、内部には「地に空に平和」と刻まれた鐘がつられ、その下に金色の鶴がつるされています。像の下の方には「これはぼくらの叫びです。これは私たちの祈りです。世界に平和をきずくための」と刻まれています。

「原爆の子の像」のモデルとなった佐々木禎子さんは2歳で被爆しましたが、外傷もなく、その後元気に成長しました。小学6年生で突然病のきざしが現れ、白血病と診断され広島赤十字病院に入院。回復を願って病床で鶴を折り続けましたが、昭和30年10月25日に帰らぬ人となりました（当時12歳）。禎子さんの死をきっかけに、同級生が原爆で亡くなった子どもたちの霊を慰め、世界に平和を築くための運動を始め、全国からの募金で像がつくられました。

原爆の子の像と平和への願い

組合員親子・理事・職員あわせて13名が参加しました。被爆者の証言を聴き、ガイドの案内で原爆ドームなどの遺構・慰霊碑を巡り、平和記念資料館を見学、被爆の実相や復興の歩みを学びました。そして碑巡りのなかで、平和記念公園内にある「原爆の子の像」へ子どもたちの手で千羽鶴が捧げられました。



戦争も核兵器もない世界へ

平和とよりよい生活のために